SHOW-HEYシネマルーム

★★★★

ぼくの家族と祖国の戦争

2023年／デンマーク映画
配給：スターキャット／101分

2024（令和6）年8月21日鑑賞　テアトル梅田

Data　２０２４－６３

監督・脚本：アンダース・ウォルター

出演：ピルー・アスベック／ラッセ・ピーター・ラーセン／カトリーヌ・グライス＝ローゼンタール／モルテン・ヒー・アンデルセン／ラッセ・ピーター・ラーセン／ペーター・クルト／ウルリッヒ・トムセン

みどころ

邦題だけでは何の戦争かわからないが、デンマーク映画だから、これは対ナチス戦争。したがって、本作は『ヒトラーもの、ホロコーストもの、ナチス映画大全集 ―戦後75年を迎えて―』に追加すべき映画だが、戦争シーンは一切登場せず、ドイツ難民に対するデンマークのリュスリンゲ市民大学の学長夫妻の行動を、その息子である12歳の少年の目線で描くものだ。

時は1945年4月。ヒトラーの自殺が4月30日だから、ドイツ降伏の直前だ。そんな状況下、ドイツ占領下にあったデンマークはドイツ人難民の受け入れを受諾せざるを得なかったが、そこから生じる様々な問題にどう対処するの？

ナチスは敵！しかし、難民の受け入れは占領下ではやむなしだが、それは体育館を提供するだけの義務だから、そこでドイツ人難民が餓死しようが、病死しようが無関係で、我関せず！たしかにそれも1つの理屈だが、さて、人間はそう割り切れる動物なの？

ポール・バーホーベン監督の『ブラックブック』（06年）も、劇団四季のミュージカル『李香蘭』（91年）もメチャ面白かったが、それと同じ視点で考えれば、「昨日の敵は、今日の友」の逆は「昨日の友は、今日の敵」だから、本作も非常に興味深い。人間の葛藤は悩ましい。しかし、そんな葛藤があるからこそ、人間なのでは！？本作ラストに見る人間の選択と決断の姿をじっくり味わいたい。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■デンマークの「ナチスもの」の新作に注目！時代状況は?■□■

私は2020年5月20日に『ヒトラーもの、ホロコーストもの、ナチス映画大全集 ―戦後75年を迎えて―』を出版したが、その「≪第2編　ナチス支配下のヨーロッパ各地は？

≫ー服従？それとも抵抗？国は？個人は？ー」には、「第 4 章　デンマークでは？ノルウェーでは？フィンランドでは？」を設け、①『ヒトラーの忘れもの』（15 年）（『シネマ 39』88 頁）、②『ヒトラーに屈しなかった国王』（16 年）（『シネマ 41』未掲載）、③『アンノウン・ソルジャー　英雄なき戦場』（17 年）（『シネマ 45』94 頁）を掲載した。これらは、日本ではほとんど知られていないナチスドイツ vs 北欧三国の戦いの“一態様”を描いた傑作だったが、今回はそこに本作が追加。

時代は 1945 年 4 月。ヒトラーが自殺したのは、『ヒトラー　～最後の 12 日間～』（04 年）（『シネマ 8』292 頁）が描いたように 1945 年 4 月 30 日だから、まさにナチスドイツ崩壊の直前だ。日本は 1945 年 8 月 15 日に無条件降伏をしたが、その直前の 3 月 26 日～7 月 2 日までは悲惨な沖縄戦が続いたし、4 月 7 日には天一号作戦において、沖縄に向かう戦艦大和が沈没したから、ちょうどその時期と重なっている。そんな時代状況下、ドイツ占領下のデンマークに、ドイツ本国からの大量の難民が押し寄せてくることに。

■□■難民を受け入れる市民大学の混乱は？■□■

本作導入部では、第 2 次世界大戦中のナチスの北欧統治の姿をしっかり勉強し、確認する必要がある。結論から言うと、ナチス占領下のデンマークは、ナチス政権から難民の受け入れを要求（命令）されれば、それを受け入れざるを得ないということだ。

もっとも、そのことの意味は、デンマークは場所と施設を提供するだけで、難民の管理責任はあくまでドイツにあるということ。この当時のドイツとデンマークとの条約上の取り決めの詳細は知らないが、私の解釈では、これは現在の日米安保条約の基地提供義務と同じようなもの（？）だから、リュスリンゲ市民大学の学長ヤコブ（ピルー・アスベック）はやむなくナチスの要求を受け入れたものの、それは体育館を一時的にドイツ難民のために提供するだけ、したがって学生の授業には全く影響しないものと考えていた。

しかし、難民の数が予定の 2 倍以上の 500 人以上に及んだ上、送り込んできたナチスの兵士たちは難民の管理を行うことなく帰国してしまったから、アレレ、アレレ・・・。難民の食料や生活用品の補給はどうするの？また、病気が発生したら医師は？薬は？法的にはその責任はすべてナチス（政府）側にあるからデンマーク（＝リュスリンゲ市民大学）＝ヤコブ学長は、難民の中に餓死者が出ても病死者が出ても放置しておけばいいだけだが、さて現実は・・・。

■□■理屈は理屈！この事態にどう対処？そこに人間性が！■□■

ナチス支配下のヨーロッパでは、各国、各地で大なり小なり、レジスタンスの活動があった。リュスリンゲ市民大学はデンマークにおけるレジスタンス活動の 1 つの拠点だったから、市民の間では「ナチス憎し！」の感情が強かった。そのため、嫌々、体育館の貸し出しには応じたものの、その中の人間の営みの中で生ずる食糧不足や病気の発生については、「我関せず」もしくは「ざまあみろ！」というスタンスで対処することはもちろん可能だ。しかし、「子供を助けてください！病気で死にそうです」と叫ぶ母親の姿に、まず同情

を示したのはヤコブの妻リス（カトリーヌ・グライス＝ローゼンタール）だった。

その時点でヤコブは当然それに反対。リュスリンゲ市民大学の学長として全体を管理する責任を負っているヤコブとしては、それは当然の姿勢だ。ところが、そんなヤコブの意に反してリスは次々と難民救済活動をエスカレート。12 歳になる息子セアン（ラッセ・ピーター・ラーセン）が家に戻ると、そこには難民の子供たちにミルクや食事を与えているリスの姿があったから、セアンもビックリなら、ヤコブもビックリだ。リスのそんな行動がさらにエスカレートすれば、ヤコブの学長としての立場にも問題（リスク）が・・・。

本作が面白いのは、そんな立場や価値観を大人の目から描くだけでなく、12 歳の子供の目でリュスリンゲ大学や両親の家庭におけるドイツ難民への対応の姿を描いたことだ。そのため、本作の邦題を『ぼくの家族と祖国の戦争』としたわけだが、これは大正解！当初、セアンはドイツ難民に同情を示す母親リスと、学長としての責任を果たすことに奮闘する父親ヤコブの間に挟まれて大いに悩んでいたが・・・。

■□■12 歳の少年の心（価値観）の揺らぎに注目！■□■

裏切り者！売国奴！これは戦争で戦う国同士になれば必然的に生まれてくる言葉だ。それが見事に描かれた「ヒトラーもの」が『ブラックブック』（06 年）（『シネマ 14』140 頁）だった。オランダでのレジスタンスの抵抗をテーマとした同作で、ナチス占領下のナチス諜報部の将校との恋を貫いた主人公たるオランダ人女性の運命は？

同作との対比で言えば、ヤコブの妻リスは、ドイツ人難民にミルクや食事を与えただけのこと。それでも、裏切り者！売国奴！になるの？もっとも、夫のヤコブは当初、妻の行為に猛反対していたものの、伝染病の広がりは体育館内のドイツ人難民だけの危機ではなく、大学全体、市民全体の危機だから、薬の支給と隔離の実施が不可欠だ、と主張したヤコブはその後、次々と“正しい行動”を取っていくことに。もっとも、それがたまたまとはいえ、留守中に入ったデンマーク人医師の病院の中から医薬品を盗み出し、ドイツ人医師のハインリヒ（ペーター・クルト）にそれを与える行動まで至ると、その可否は？セアンは本作中盤以降ずっと、そんな両親の行動を観察し、父親に同行していたが、自分自身が仲間たちから“裏切り者”“売国奴”と罵られ、疎外されていくと、12 歳の少年の心（価値観）の揺らぎは如何に？

ひどいのは、子供たちのゲームの中でセアンにはナチス兵の役ばかりが押し付けられた上、ひどい侮辱（リンチ）を受けたこと。たまたま森の中でそんなセアンの姿を発見したドイツ人難民の少女ギセラに助けられたから良かったものの、万一あのまま放置されていたら・・・。

■□■12 歳なら立派に自分の意思を！彼はどっち側に？■□■

本作の中心人物はヤコブ、リス夫妻と 12 歳の息子セアンだが、もう一人、セアンが兄のように慕っている男、ビルク（モルテン・ヒー・アンデルセン）がいつもこの家族と共にいた。ビルクはドイツ難民にミルクや食事を与えるリスとは反対に、大学の管理者として

の責任を全うしようとするヤコブを尊敬していたが、次第にヤコブが“ドイツ難民寄り”になっていくと・・・？

ビルクは自分の父親がドイツ軍に殺されたことを恨みに思っていたため、リュスリンゲ市民大学で筋金入りのレジスタンス活動を展開していたから、ナチスの敗北が間近だと言っても、「今はまだ戦争中だ」「そんな中、ドイツ難民に手を差し伸べる行為は利敵行為だ」という立場を明確にしていた。したがって、子供たちから裏切り者！売国奴！と罵られ、強烈なリンチを受けたセアンの心が次第に父親からビルクに移っていったのは仕方ない。そんなセアンの心の中の変化を読み取り、「自分もビルクのために何らかの役に立ちたい」と願う純粋なセアンの気持ちを尊重したビルクは、イギリスのレジスタンスへ拳銃を届けるという危険な任務を、「子供ならドイツ兵にとがめられることはない」と主張するセアンの意思に沿って与えたが、ある日それをヤコブが知ることになると・・・？

■□■ナチスが降伏すると？昨日の敵は今日の友！■□■

『ブラックブック』の終盤20分では、ナチスの降伏に喜び、熱狂するオランダ市民たちの姿が描かれていた。これは1945年8月15日に天皇陛下の“玉音放送”を涙ながらに聞いた日本国民の姿と正反対の姿だが、同時にポール・バーホーベン監督がそこで描いたのは、ナチス諜報部員の将校とねんごろの仲になっていた同作の主人公たるユダヤ人女性が、レジスタンスによって戦犯として裁かれる姿だ。ナチスドイツの降伏後は、それまで虐げられてきたレジスタンスの闘士たちが、オランダ人の裏切り者、売国奴たちを裁く立場になったのは当然だが、同作ではあまりにもひどい仕打ちを受けるヒロインの姿を見せつけられたから、その“落差の大きさ”にビックリ！

劇団四季のミュージカル大好き人間の私は、『李香蘭』(91 年）や『異国の丘』(01 年）（『シネマ1』98頁）がとりわけ大好きだ。『異国の丘』は、その前半では、時の総理大臣・九重菊麿の息子・九重秀隆と、時の中国の最高権力者・蒋介石政権の司法大臣の娘・愛玲との、戦時下でありながら「ロミオとジュリエット」にもよく似た（？)、激しくも切ない恋物語が描かれていた。しかし、その後半は一転し、吉田正作曲の「今日も暮れゆく異国の丘に、友もつらかろ、せつなかろ・・・」の歌詞で有名な名曲『異国の丘』が誕生する姿を描く名作だった。また、『李香蘭』は、日本人でありながら、中国の歌姫「李香蘭」としてスター街道を突き進んだ山口淑子が、実は日中戦争や満州国を巡る政治問題における日本軍の宣伝工作の道具（アイコン）として利用されていたことを指摘し、そんな李香蘭＝山口淑子が日本敗戦後、祖国の反逆者として中国の法廷で裁かれる姿を描いた名作だった。そのため、同作では「日本と中国。かつて2つの国に運命を引き裂かれた歌姫がいたー。」のフレーズがぴったり決まっていた。

■□■結末に注目！それぞれの人間としての選択と決断は？■□■

そうすると、本作のヤコブは？また、最初にドイツ人難民に人道的対処をした妻のリスは？逆に、あくまでリスやヤコブの行動を批判し、レジスタンスとしての“正しい行動”

を取り続けたビルクは？他方、大人たちの世界に「昨日の敵は、今日の友」、裏返せば「昨日の友は、今日の敵」の流れが強まったのは仕方ないが、あの日自分を救ってくれたドイツ人難民の少女ギセラがジフテリアに罹患し、死にそうになっていることを知ったセアンの取るべき行動は？それは、少年ながらもビルクを手伝ってレジスタンスの闘士然とした行動を今も貫くこと？それとも、目の前で死にかかっているギセラを何が何でも助けること？ナチスドイツの降伏後、ヤコブは家族が生きていくためには何とか学長職に留まる必要があると考え、“正論”を吐くのを控えていたし、妻のリスもそれに同調していた。しかし、今セアンは自転車の荷台にジフテリアに感染したギセラを乗せて医者探しに向かったらしい。それを知ったヤコブはセアンの行動を止めようとしたが、逆に・・・。

本作ラストのクライマックスは、そんなセアンの“正義の行動”とセアンの熱意に負けたヤコブが自ら車のハンドルを握り、セアンとギセラを乗せて医者を探しに向かう途中で、何と偶然にもビルクが指揮するレジスタンスの検問にぶつかるシーンになる。車を停められ、ビルクの尋問を受けるヤコブとセアンはどう答えるの？そして、ビルクは 2 人の説明をどう受け止め、どう対処するの？

人間の営みにはいろいろあるが、映画はこんな形でギリギリの局面を描くことができる芸術だから素晴らしい。そこで、「ああやっぱり、人間っていいものだなぁ」と思えるか否か？本作の主人公たちそれぞれの人間としての選択と決断の姿は、あなた自身の目でしっかりと！

2024（令和 6）年 8 月 23 日記